

創世記23－24章「サラの亡き後」

1A サラの埋葬 23

1B 私有の墓地 1－9

2B マクペラの畑地 10－20

2A リベカの嫁入り 24

1B イサクを連れて行かない旅 1－9

2B 祈り終わらないうちの導き 10－21

3B しもべの迎え入れ 22－32

4B イサクの説き明かし 33－49

5B 間髪入れない帰路 50－61

6B サラの天幕への招き 62－67

本文

創世記 23 章に入ります。私たちは、アブラハムの生涯からイサクの生涯へ移る、その過渡期を見ていきます。アブラハムに与えられた約束の子、イサクについて、主は、アブラハムを試し、それで確かに神を恐れていることを知り、子孫によって彼を祝福することを確認されました。しかし、その約束の子イサクに、子がいなければ元も子もありません。次の学び、25 章にはイサクが 40 歳の時に妻を得たとありますが、すでに 40 歳近くになっているのに、結婚をしていなかったです。そこでアブラハムは、息子のためにお嫁探しをしてあげないといけなかったと思います。

1A サラの埋葬 23

そのお嫁探しを本格的に行うきっかけになったことがあります。それが、自分の妻サラの死です。

1B 私有の墓地 1－9

¹ サラの生涯、サラが生きた年数は百二十七年であった。

サラが 127 歳で死んだということは、アブラハムは今、137 歳です。

今、日本の政治で話題になっているのは、天皇は男系でなければいけないという保守的な人々と、拘らなくてよいという人々の間での議論ですが、聖書の系図は男系です。神の約束を受けた男たちが、何歳まで生きて、どこで葬られたかなどの記録が残されています。それが、サラについては、系図に連なる男と同じような記述を、著者モーセは行っています。

それは、とりもなおさず、主ご自身がサラと特定して、彼女から約束の男の子が与えられると決

めておられたからです。旅人三人の一人としても現れ、彼女にも直接、お語りになりました。そして 21 章の冒頭には、アブラハムではなくサラを中心にして、約束がかなえられたことを強調しています。彼女は、おそらくは、将来的に現れる女の子孫を予告するような人になったのでしょう。つまり、マリアです。約束の子を、胎が死んだも同然なのに宿したように、マリアは、男の人を知らないのに、それでも聖霊によってイエスを身ごもりました。

そして使徒は、サラを取り上げて、彼女の信仰に倣うように勧めています。「Ⅰ ペテ 3:6 たとえば、サラはアブラハムを主と呼んで従いました。どんなことをも恐れなくて善を行うなら、あなたがたはサラの子です。」妻たちに対する勧めとして、サラに倣いなさいとペテロは勧めています。

²サラはカナン地のキルヤテ・アルバ、すなわちヘブロンで死んだ。アブラハムは来て、サラのために悼み悲しみ、泣いた。

ここの箇所を読むと、アブラハムはサラと違うところにいたことがわかります。おそらく、ヘブロンに天幕があったけれども、アブラハムは彼女を置いて、ベエル・シェバとか、あるいはもっと南、ネゲブのほうに放牧に行き、いわば出張していたのかもしれませんが。それで、突然の彼女の死の知らせを受けたのかもしれませんが。ですから、彼の悲しみは、サラを看取ることができなかったことで、なお一層、強かったのかもしれませんが。悼み悲しんで、泣いています。

³アブラハムは、その亡き人のそばから立ち上がり、ヒッタイト人たちに話した。⁴「私は、あなたがたのところに在住している寄留者ですが、あなたがたのところで私有の墓地を私に譲っていただきたい。そうすれば、死んだ者を私のところから移して、葬ることができます。」

ここに、アブラハムの信仰の姿勢が、明確に表れています。「寄留者」ということです。彼は遊牧民ですから、そう言っているのですが、これは、明らかな信仰の発言です。彼は、カナン地があなたの子孫のものになると明確に、約束されているのに、自分自身は、寄留者であるとはっきりと言っています。そして、彼は自分自身が所有するつもりもありません。唯一、サラ、また後に自分自身や息子たちも葬られるであろう、墓の敷地を購入したいということです。

ヘブル 11 章 13 節から 16 節までを読みます。「11:13-16 これらの人たちはみな、信仰の人として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるか遠くにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり、寄留者であることを告白していました。14 そのように言っている人たちは、自分の故郷を求めていることを明らかにしています。15 もし彼らが思っていたのが、出て来た故郷だったなら、帰る機会はあったでしょう。16 しかし実際には、彼らが憧れていたのは、もっと良い故郷、すなわち天の故郷でした。ですから神は、彼らの神と呼ばれることを恥となさませんでした。神が彼らのために都を用意されたのです。」

これらの人たちというのは、アブラハム、イサク、ヤコブのことです。彼らは遊牧民としてカナン
の地にいましたが、それは、信仰の現れでした。自分の子孫がここを所有すると信じていました。
ただそれだけではありません。後に来る、天と地が過ぎ去った後に、神が天からくださる、天のエ
ルサレムの都を待ち望んでいたのです。そこにこそ、自分の故郷があると信じていました。私たち
も同じですね、地上においては寄留者、そして天から降りてこられるイエスを待ち望んでいます。

⁵ ヒッタイト人たちはアブラハムに答えた。⁶「ご主人、私たちの言うことをお聞き入れください。あな
たは、私たちの間にあって神のつかさです。私たちの最上の墓地に、亡くなった方を葬ってくださ
い。私たちの中にはだれ一人、亡くなった方を葬る墓地をあなたに差し出さない者はおりません。」

これは、とても丁寧なあいさつですが、土地の売買のための交渉の始まりです。その儀礼的な
文言が、この言葉になっています。しかし、そのことばの中にも、確かに神の証しがあります。アブ
ラハムのことを、「私たちの間にあって神のつかさです」と言っています。ペリシテのアビメレクも、
「神があなたとともにいる」と言っていましたね。アブラハムに、神がおられるということで、彼には
悪いことをしてはいけないということをよく知っていました。地の塩になっている人々は、このように、
神を信じていない人々にも、何か神を恐れ敬わないといけないという影響力を与えます。

⁷ そこで、アブラハムは立って、その土地の人々、ヒッタイト人に礼をして、⁸ 彼らに告げた。「死んだ
者を私のところから移して葬ることが、あなたがたの心にかなうのであれば、私の言うことをお聞き
入れくださり、ツォハルの子エフロンに頼んでいただきたいのです。⁹ 彼の畑地の端にある、彼の所
有のマクペラの洞穴を譲っていただけるようにです。十分な価の銀と引き換えに、あなたがたの間
での私の所有の墓地として、譲っていただけるようにしてください。」

ヒッタイト人たちは、アブラハムにどこで良いと選択肢を与えたので、アブラハムは、具体的に、
彼らの中のエフロンが持っている畑地の一部を購入したいと申し出ます。マクペラの洞穴です。イ
エスが葬られた時も、岩を切り出した穴でしたね。あの地域は岩が多いので、葬る時は洞穴や、
岩を切り出した穴に葬ります。

2B マクペラの畑地 10-20

¹⁰ エフロンはヒッタイト人たちの間に座っていた。ヒッタイト人のエフロンは、その町の門に入るヒッ
タイト人たち全員が聞いているところで、アブラハムに答えた。

当時、門が行政的手続きをする場でした。そこに、他のヒッタイト人が見えているところで、彼らを
証人に立てて、土地購入の法的手続きをします。

¹¹「いいえ、ご主人。どうか、私の言うことをお聞き入れください。あの畑地をあなたに差し上げます。」

そこにある洞穴も差し上げます。私の民の者たちの前で、それをあなたに差し上げます。亡くなった方を葬ってください。」¹² アブラハムは、その土地の人々に礼をし、¹³ その土地の人々の聞いているところで、エフロンに告げた。「もしあなたが許してくださるなら、私の言うことをお聞き入れください。畑地の価の銀をお支払いします。どうか私から受け取ってください。そうすれば、死んだ者をそこに葬ることができます。」

「差し上げます」と言っても、額面どおりではありません。アブラハムが強く購入したいということを出し出すことができるための、お膳立てにしかすぎません。私たちアジアの文化でも、こんなことはよくありますよね。何かをあげようとして、「いいえ、結構ですよ。」と相手は強く拒むのですが、こちらはもっと強気に出て、「受け取りなさいよ。」と言います。「ああ、そうですか……。」と相手は喜んで受け取るのです。それはこちらが本当に心を込めて与えようとしていることを表現するために、相手は、初めは断るのです。

¹⁴ エフロンはアブラハムに答えた。¹⁵「では、ご主人、私の言うことをお聞き入れください。銀四百シェケルの土地、それなら、私とあなたの間では、何ほどのこともないでしょう。どうぞ、亡くなった方を葬ってください。」¹⁶ アブラハムはエフロンの申し出を聞き入れた。アブラハムはエフロンに、彼がヒッタイト人たちの聞いているところにつけた価の銀を支払った。それは商人の間で通用する銀四百シェケルであった。

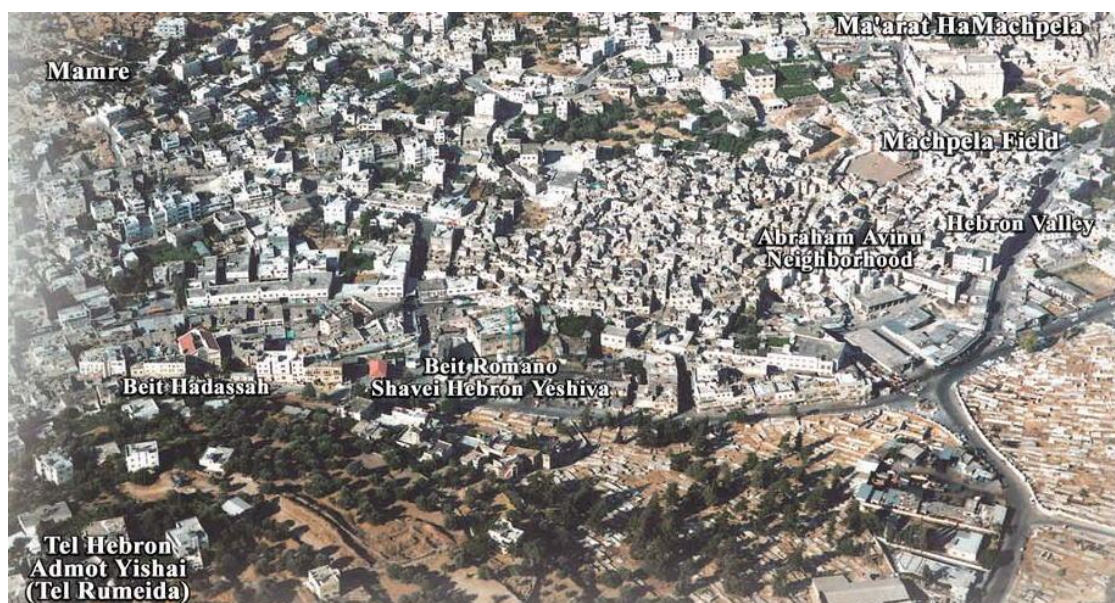
エフロンは驚いたに違いありません。交渉は、これから始まるのです。銀四百シェケルは、法外な値段です。中東に行くと、初めに言った額に対して、こちらが強く出て交渉すると一気に、十分の一になったりします。しかし、アブラハムは言い値で購入することに決めたのです。これは、アブラハムには富が多くあったことが、あるでしょう。けれども、それ以上に、信仰によって動いているので、神の導きだと信じているに違いありません。サラだけでなく、これから自分、そして息子たち、その妻たちも葬られるであろう墓になると、彼は信仰の人ですから、見据えていたことでしょう。

¹⁷ こうして、マムレに面するマクペラにあるエフロンの畑地、すなわち、その畑と、畑地にある洞穴と、畑地の周りの境界線内にあるすべての木は、¹⁸ その町の門に入るすべてのヒッタイト人たちの目の前で、アブラハムの所有となった。

「木」は、乾燥したイスラエルの地にとって、希少です。それで、土地の中にある木によってその価値が定まるので、木が敢えて言及されています。

¹⁹ その後アブラハムは、マムレに面するマクペラの畑地の洞穴に、妻サラを葬った。マムレはヘブロンにあり、カナンの地にある。²⁰ こうして、この畑地とその中にある洞穴は、ヒッタイト人たちの手から離れて、私有の墓地としてアブラハムの所有となった。

今も、ヘブロンに行くと、まさにここに書かれているところに「族長の墓」があります。私は、2010年に訪問しました。上空からの写真を見ると、よく分かります。(左上にマムレ Mamre があります。そしてその向かい、右上にマクペラ(Machpela)があります。)今は、ヘロデ式の建物がありますが、その下が洞穴になっていると言われています。



2A リベカの嫁入り 24

1B イサクを連れて行かない旅 1ー9

¹ アブラハムは年を重ねて、老人になっていた。主は、あらゆる面でアブラハムを祝福しておられた。

主の約束は、彼が老人になっても続いていることがわかります。12章2節で、あなたを祝福すると言っていました。そして、これは霊的な事柄だけでなく、財産においても同じです。多くの金銀や奴隷、家畜を有していました。そこで次の話になります。

² アブラハムは、自分の全財産を管理している、家の最年長のしもべに、こう言った。「あなたの手を私のもの下に入れてくれ。」

この全財産を管理しているのは、おそらく15章2節でアブラハムが言及した、「**ダマスコのエリエゼル**」なのではないか？と思います。アブラハムに対して、主が報いが大きいと約束された時に、自分には子がいない。「**私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのでしょうか。**」と言っています。そして、興味深いのは、エリエゼルの名は、「神は我が助け」であります。

ここから、午前礼拝で学んだ、アブラハムのしもべの役割になります。22章で、私たちは、アブラハムがイサクを献げようとする姿から、父なる神が愛する独り子キリストを、私たちの罪のいけ

¹ <http://www.machpela.com/english/> より。今は稼働していない。

にえとしてお献げになったことが映し出されていることを見ました。そして24章では、富んでおられる父が、子に相続を与えようとしていて、それで、子にかわって遣わしたのが、聖霊であることが、イエスが語られたことです。「もうひとりの助け主」です。そして、もうひとりの助け主は、キリストご自身と何ら変わらない性質をお持ちです。全財産を任されているしもべも、似ています。

「**あなたの手を私のももの下に入れてくれ**」というのは、厳粛な誓いを立てさせるためです。ももの下とは、男性器の下という意味です。アブラハムからの子種から、神の約束の子孫が出てくるのです。これから、イサクのお嫁さん探しに行かせます。そのお嫁さんとイサクとの間にできる子が、アブラハムの約束を受け継ぐのです。ですから、厳粛なのです。

³ 私はあなたに、天の神、地の神である主にかけて誓わせる。私はカナン人の間に住んではいるが、あなたは、その娘たちの中から、私の息子の妻を迎えてはならない。⁴ あなたは、私の国、私の親族のところに行って、私の息子イサクに妻を迎えなさい。」

天と地の神として、天と地を証人に立てています。その厳粛な誓いの第一は、カナン人の娘たちから妻を迎えてはならない、です。かつて、アブラハムが自分の妻を妹だと偽って、サラがエジプトのファラオの妻になりそうになりました。また、アビメレクの妻になりそうになりましたが、そのことによってアブラハムの子孫が途絶えてしまうことになります。それは、自分自身の失敗から絶対にそうさせないと命じています。そして、ノアの預言にあったように、カナン人は呪われるようなことを、その忌まわしい行いをしています。そこで、アブラハムの親族がいる、かつて留まっていたハランの地域まで行きなさいと命じます。

⁵ しもべは彼に言った。「もしかしたら、その娘さんが、私についてこの地に来ようとしなくてもいいかもしれません。その場合、ご子息をあなたの出身地へ連れて戻らなければなりませんか。」⁶ アブラハムは彼に言った。「気をつけて、息子をそこへ連れて戻ることのないようにしなさい。」⁷ 天の神、主は、私の父の家、私の親族の地から私を連れ出し、私に約束して、『**あなたの子孫にこの地を与える**』と誓われた。その方が、あなたの前に御使いを遣わされるのだ。あなたは、そこから私の息子に妻を迎えなさい。⁸ もし、その娘があなたについて来ようとしなければ、あなたは、この、私との誓いから解かれる。ただ、私の息子をそこに連れて戻ることだけはしてはならない。」

まさか、本人のイサクを連れて行かないで、相手の家も納得しないだろうにと、アブラハムのしもべは思います。けれども、そこはアブラハムには信仰が与えられています。主の御使いが遣わされると。そして、アブラハムがそこまで拘るのは、ここで言っているように、彼がエジプトに下った過ちがあるからです。「**あなたの子孫にこの地を与える**」ということです。ここで、イサクの使命、その召しが明らかにされています。彼は、約束の地に留まるというところに大きな使命があります。その使命のほうが、結婚相手を探すよりも大事だと判断したのです。

主は時に、私たちに無理難題に見えることを行わせようとしますね。けれども、アブラハムは経済済みです。愛する独り子イサクを献げなさいと命じられました。けれども、神は、ご自分の解答をお持ちでした。だから、アブラハムも、主がしもべの前に御使いを遣わしてくださると信じていました。しもべにとって無理難題なのはわかっています。けれども、主が解答をお持ちだとしたのです。

⁹ それでもべは、主人であるアブラハムのももの下に自分の手を入れ、このことについて彼に誓った。

これから、しもべは、主人の使命を帯びて旅に出かけます。

2B 祈り終わらないうちの導き 10-21

¹⁰ しもべは主人のらくだの中から十頭を連れて出かけた。主人のあらゆる良い品々をその手に携えていた。彼は立って、アラム・ナハライムのナホルの町へ行った。

なんと、十頭ものらくだを連れています。これは、お嫁さんになる人や、彼女に仕える侍女などが乗るらくだも、です。けれども往きは、ここにある、主人のあらゆる良い品々を運搬しています。これらの貴重な品々は、花嫁に対する結納金です。「十頭」という数字が、気になります。聖書では、十は、試す時に出てくる数字だからです。信仰が試されています。

そして、「アラム・ナハライム」は今のシリア北部であり、ユーフラテスの上流にある地域です。上流は、川がちょうど湾曲になっているところがあり、その湾曲の地域が、アラム・ナハライムです。かつて神がアブラハムに、エジプトの川からユーフラテスまでと言われた、その北の境になります。そして、ハランの町もその地域にあります。そこに、アブラハムの兄弟ナホルの町がありました。

¹¹ 彼は夕暮れ時、水を汲む女たちが出て来ころ、町の外の井戸のそばにらくだを伏させた。

新約聖書で、サマリアの女は正午頃、井戸に座っているイエス様と出会いましたが、それは極めて不自然な光景でした。このように通常は、夕暮れ時に水を汲みに来ます。そして、水汲みは、女の役目でした。当時は、女たちはかなり、筋肉が発達していたと思います。今なら工事現場で働くような、重労働を女性たちが平気でこなしていました。

¹² そうして言った。「私の主人アブラハムの神、主よ。どうか今日、私のために取り計らい、私の主人アブラハムに恵みを施してください。¹³ ご覧ください。私は泉のそばに立っています。この町の人々の娘たちが、水を汲みに出て来でしょう。¹⁴ 私が娘に、『どうか、あなたの水がめを傾けて、私に飲ませてください』と言い、その娘が、『お飲みください。あなたのらくだにも水を飲ませましょう』と言ったなら、その娘こそ、あなたが、あなたのしもべイサクのために定めておられた人です。この

ことで、あなたが私の主人に恵みを施されたことを、私が知ることができますように。」

しもべは、アブラハムへの神の恵みを祈っています。恵みとは、受けるに値しない者が受けることです。全く、神の主権で良くしてくださることです。このことについては、全く自分たちでは、操作したり、コントロールできません。

そして、大事なのは、彼が祈っている時に、お嫁さんになる娘は、ただ自分に水を飲ませるだけでなく、らくだにも飲ませましようと言おうということです。見目麗しい娘よりも、仕える心、姿勢があるかどうか、それを彼は、心の祈りの中で語ったのです。先ほど、ペテロ第一の手紙から、サラが妻たちの模範になっていることを話しましたが、同じ箇所、ペテロはこう言っています。「3:4 むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人を飾りとしなさい。それこそ、神の御前で価値あるものです。」外面でなく、内面の美しさです。

¹⁵ しもべがまだ言い終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せて出て来た。リベカはミルカの子ベトエルの娘で、ミルカはアブラハムの兄弟ナホルの妻であった。

これがすごいことです。まだ言い終わらないうちに、リベカが水がめを肩に載せて出て来ています。ここで、すでにリベカが誰であるかが書かれていますが、もちろん、これは、アブラハムのしもべには、この時点では知らされていません。主は、祈りについて、ずっと後にそれをかなえられる時もありますが、主には定めた時を持っておられて、今すぐにでも行おうとされることについて、祈ったらすぐかなえることもあります。

¹⁶ この娘は非常に美しく、処女で、男が触れたことがなかった。彼女は泉に下りて行き、水がめを満たして上がって来た。

美しかったです、それが大事なわけではありません。それよりも、処女だということは絶対条件ですね。未婚でなければいけません。そして、「泉に下りて行き」とあります。みなさんが想像するような井戸では、中東ではありません。井戸は、乾いた土地を掘り起こして、それで出てくることが多いので、少し降りていくことが多いのです。ここは、地下からの泉が湧き出ている井戸です。

¹⁷ しもべは彼女の方に走って行って、言った。「どうか、あなたの水がめから、水を少し飲ませてください。」

しもべは、緊張していたことでしょう、勇気を出して、一歩踏み出して、リベカに言いました。

¹⁸ すると彼女は、「どうぞ、お飲みください。ご主人様」と言って、すばやくその手に水がめを取り降ろし、彼に飲ませた。¹⁹ 水を飲ませ終わると、彼女は、「あなたのらくだにも、飲み終わるまで、水を

汲みましょう」と言った。

すごいですね、しもべの祈った通りになっています。

²⁰ 彼女は急いで水がめの水を水ぶねにあげ、水を汲みに、再び井戸まで走って行き、すべてのらくだのために水を汲んだ。²¹ この人は、主が自分の旅を成功させてくださったかどうかを知ろうと、黙って彼女を見つめていた。

十頭のらくだの飲む水ですから、相当な量でしょう。それを、手際よく、どんどん水を汲みにしています。上がった、下がったりしています。聖書の女性は、箴言の最後に、賢明な妻が出てきますが、そこも、腕をふるって家業を営む、そして切り盛りしている、勇ましい姿が出てきます。言われたことだけをしている、消極的な姿ではありません。

3B しもべの迎え入れ 22－32

²² らくだが水を飲み終わったとき、その人は、重さ一ベカの金の飾り輪と、彼女の腕のために、重さ十シェケルの二つの金の腕輪を取り、²³ 尋ねた。「あなたは、どなたの娘さんですか。どうか私に言ってください。あなたの父上の家には、私どもが泊めていただける場所があるでしょうか。」

「一ベカ」は5.7グラムなので、鼻の飾り輪が5.7グラム、腕輪は57グラムです。これを彼女に与えているのは、花嫁への結納金のうちの、さらにごく一部であり、彼女をイサクの妻にするための、しるしです。

²⁴ 彼女は答えた。「私は、ミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です。」²⁵ また言った。「藁も飼料も、私たちのところには、たくさんあります。それに、お泊まりになる場所も。」

見事に、アブラハムの親戚の家の娘でした！これで、彼はどうしたでしょうか？

²⁶ その人は、ひざまずき、主を礼拝して、²⁷ こう言った。「私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は、私の主人に対する恵みとまことをお捨てになりませんでした。主は道中、この私を導いてくださいました。主人の兄弟の家にまで。」

主を礼拝しています。そして賛美し、感謝を献げています。ノアもそうでしたね、箱舟から出て、全焼のいけにえを献げました。そして、今、しもべが感じていることは、「主人に対する恵みとまこと」であります。恵みだけでなく、まことです。つまり、真実です。主は、裏切らなかった、誠実に守ってくださいましたということです。

そして、何よりも、「この私を導いてくださいました」であります。私たちも、主の導きについて、多くが求めていますね。主は必ず導いてくださいます。

²⁸ その娘は走って行って、母の家の者に、これらのことを告げた。²⁹ リベカには兄がいて、その名をラバンといった。ラバンは外へ出て、泉のそばにいるその人のもとへ走って行った。

「アブラハム」の名が出た時に、リベカは事の重要性をはっきりと認識しました。走って、これらのことを告げています。そして、「母の家」と言っています。後でわかってきますが、父ベトエルは、何の理由かがわかりませんが、もう家の中で力を失っています。兄であるラバンが家の実質的な、主になっているようです。

³⁰ 彼は、飾り輪と、妹の腕にある腕輪を見、また、「あの人が私にこう言われました」と言った妹リベカのこぼれ話を聞くとすぐに、その人のところに行った。すると見よ、その人は泉のそば、らくだのそばに立っていた。³¹ そこでラバンは言った。「どうぞ、おいでください。主に祝福された方。なぜ外に立っておられるのですか。私は、お宿と、らくだのための場所を用意しております。」

ラバンは、この人を迎え入れたのは、リベカについていた金の鼻輪と腕輪でした。これは、ただ事ではないことは分かっていました。ただ、もしかしたら、彼の狡猾で貪る心が表れているのかも知れません。後に、ラバンがヤコブに対して行った仕打ちから、その貪る性質が明らかにされます。

³² それで、その人は家の中に入った。らくだの荷が解かれ、らくだに藁と飼料が与えられ、彼の足と、一緒にいた従者たちの足を洗う水も与えられた。

当時の習慣には、客に対して水で足を洗うことがあります。イエスも弟子たちの足を洗い、それで、しもべの姿を取り、仕え合うことを教えられました。

4B イサクの説き明かし 33－49

³³ それから、彼の前に食事が出されたが、彼は「私の用件を話すまでは、いただきません」と言った。「お話しください」と言われて、³⁴ 彼は言った。「私はアブラハムのしもべです。」

中東では話しの本題に入る前に、いろいろなことを行ないます。本題の前の雑談が非常に長いそうです。ここでは会食を取ろうとしています。けれども、その慣わしに反して、彼は本題から入りました。

ここに、しもべにある使命の強さがうかがえます。いろいろやらなければいけないことがあっても、第一のものを第一にしていくのです。それを、威厳をもって、権威をもって、大胆に語ります。聖霊

がしてくださるのは、このことです。まずしなければいけないこととしていくように、力を与えられます。

³⁵ 主は私の主人を大いに祝福されましたので、主人は富んでおります。主は主人に、羊や牛、銀や金、男女の奴隷、らくだやろばをお与えになりました。³⁶ 私の主人の妻サラは、年をとってから主人に男の子を産み、主人はこの子に自分の全財産を譲っておられます。

まず、主人のアブラハムの富を紹介しています。次に息子イサクがその全財産を受け継ぐことを話しています。午前礼拝でお話ししましたとおり、父なる神は御子キリストに全てのことを与えられ、ご自分の相続者とされました。

³⁷ 私の主人は、こう言って、私に誓わせました。『私が住んでいるこの地のカナン人の娘たちの中から、私の息子の妻を迎えてはならない。³⁸ あなたは、私の父の家、私の親族のところへ行って、私の息子に妻を迎えなさい。』³⁹ そこで私は主人に申しました。『もしかしたら、その娘さんは私について来ないかもしれません。』⁴⁰ すると主人は答えました。『私は主の前に歩んできた。その主が御使いをあなたと一緒に遣わし、あなたの旅を成功させてくださる。あなたは、私の親族、私の父の家から、私の息子に妻を迎えなさい。⁴¹ 次のようなときは、あなたは私との誓いから解かれる。あなたが私の親族のところに行ったときに、もし彼らがあなたに娘を与えないなら、そのとき、あなたは私との誓いから解かれる。』

初めに出てきた、アブラハムとの会話を、そのまま話しています。私たちも、理屈ではなく、神の救いのことばを、そのまま語ります。使徒たちの宣教を見ると、そうですね。そのまま、イエスが何を行われたかを伝えました。

⁴² 今日、私は泉のそばに来て言いました。『私の主人アブラハムの神、主よ。私がここまで来た旅を、もしあなたが成功させてくださるのなら――。』

初めの時は分かりませんでした。すぐに祈ったのではなく、ここでためらっていたんですね。言葉にもならないうめきが、あったのでしょうか。そして、次の言葉が祈りに出てきました。

⁴³ ご覧ください。私は泉のそばに立っています。若い娘が水を汲みに出て来たなら、私は「あなたの水がめから少し水を飲ませてください」と言います。⁴⁴ その人が私に、「どうぞ、お飲みください。あなたのらくだにも水を汲みましょう」と言ったなら、その娘さんこそ、主が私の主人の息子のために定められた方です。』

信仰によって祈っていたら、主がこの祈りも導かれています、この言葉になりました。

⁴⁵ 私が心の中で言い終わらないうちに、なんと、リベカさんが水がめを肩に載せて出て来たのです。そして、泉に下りて行き、水を汲みました。それで私が『どうか水を飲ませてください』と言うと、⁴⁶ 急いで水がめを肩から降ろし、『お飲みください。あなたのらくだにも水を飲ませましょう』と言われたので、私は飲みました。らくだにも水を飲ませていただきました。

ここまで祈った通りです、そこで確認です。

⁴⁷ 私が尋ねて、『あなたは、どなたの娘さんですか』と言いますと、『ミルカがナホルに産んだ子ベトエルの娘です』と答えました。そこで私は、彼女の鼻に飾り輪をつけ、彼女の腕に腕輪をはめました。

その通りでした、それで飾りを付けています。これが、聖霊が私たちに救いの確認、保証として与えられたと、午前礼拝でお話したとおりです。

⁴⁸ そして私はひざまずき、主を礼拝し、私の主人アブラハムの神、主をほめたたえました。主は、私の主人の親族の娘さんを主人の息子に迎えるために、私を確かな道に導いてくださったのです。

⁴⁹ それで今、あなたがたが私の主人に恵みとまことを施してくださるのなら、私にそう言ってください。もしそうでなければ、そうでないと私に言ってください。それによって、私は右か左に向かうことになります。」

自分は、主が導かれたことを確信しています。けれども、これは相手あつてのことです。それで、相手の決断に従うと、任せています。私たちが、伝道をして、信仰の決心に導く時も同じですね。相手に、その選択を明らかにさせます。モーセも説教もそうでした。いのちと死の道の二つがあることを示しました。イエス様もそうでした。狭い道と、広い道の二つがあることを語られましたね。

5B 間髪入れない帰路 50－61

⁵⁰ ラバンとベトエルは答えた。「主からこのことが出たのですから、私たちはあなたに良し悪しを言うことはできません。⁵¹ ご覧ください。リベカはあなたの前におります。どうぞお連れください。主が言われたとおりに、あなたのご主人の息子さんの妻となりますように。」

そうですね、主から出たものであればそのよしあしを言うことはできません。使徒の働きでも、異邦人が聖霊のバプテスマを受けたのを見たペテロが、「**どうして私などが、神がなさることを妨げることができませんでしょうか。(11:17)**」と言いましたね。

また、ここで彼らは、アブラハムを召した神のことを知っています。同じ親戚で、主に言われて、ウルの出た仲間です。アブラハムが、親戚のうちから嫁を探しなさいと命じたのも、同じ神を

知っているということがあったからです。

⁵² アブラハムのしもべは、彼らのことばを聞くやいなや、地にひれ伏して主を礼拝した。

再び、エリエゼルは主を礼拝しています。一つ一つに、主の働きを覚えて、主を拝しています。

⁵³ そして、このしもべは銀や金の品物や衣装を取り出して、リベカに与えた。また、彼女の兄や母にも貴重な品々を贈った。

午前礼拝で話した通りです。花嫁への結納金ですが、これが聖霊ご自身が、御国の贖いの保証、あるいは頭金であることを話しました。

⁵⁴ このしもべと、ともにいた従者たちは、食べたり飲んだりして、そこに泊まった。朝になって彼らが起きると、そのしもべは「私の主人のところへ帰らせてください」と言った。⁵⁵ 彼女の兄と母は、「娘をしばらく、十日間ほど私たちのもとにとどまらせて、その後で行かせるようにしたいのですが」と言った。⁵⁶ しもべは彼らに、「私が遅れないようにしてください。主が私の旅を成功させてくださったのですから。主人のところへ行けるように、私を帰らせてください」と言った。

ここにも、しもべの使命の高さがうかがわれます。ためらってはいけないのです。多くの人が、主からの召しにためらいます。何を待っているのか分からないのに、待っていることがありますね。ここで興味深いのは、「十日間」です。先に話したように、これは試す数字です。名残惜しいから残すのですが、そうしているうちに、思いが変わってくるかもしれません。ためらうことなく、勇気をもって決断するのです。

⁵⁷ 彼らは答えた。「娘を呼び寄せて、娘の言うことを聞いてみましょう。」⁵⁸ 彼らはリベカを呼び寄せて、「この人と一緒に行くか」と尋ねた。すると彼女は「はい、行きます」と答えた。

これが、リベカの信仰です。そのまま従っています。呼びかけに従っています。私たちも、キリストの花嫁として、主の言われることにそのまま従うのです。思い煩うことなく、任せます。

⁵⁹ そこで彼らは、妹リベカとその乳母を、アブラハムのしもべとその従者たちと一緒に送り出した。

リベカがまだお乳を飲んでいて時に世話をしていた乳母も、彼女を助けるために旅立ちます。

⁶⁰ 彼らはリベカを祝福して言った。「われらの妹よ、あなたは幾千万にも増えるように。あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように。」

分かりますか、ここでの約束は、神がアブラハムに与えたものです。イサクを献げようとした後に、主が、彼に敵の門を子孫が勝ち取ると言われました。これが、女の子孫への約束、蛇の子孫の脳天を打ち砕くという、霊の戦いにおける勝利の約束、キリストの約束です。

⁶¹ リベカとその侍女たちは立ち上がり、らくだに乗って、その人の後について行った。こうして、しもべはリベカを連れ帰った。

乳母だけでなく、他にも助ける女たちがいたようです、侍女たちと言っています。そして彼女たちはらくだに乗ります。必ずしも、居心地の良いものではありません。歩く距離は約 1000 キロメートルです。相当なものです。聖霊は、キリストに私たちが会う時まで、その試みや落胆の道を、励まし、となりにいてくださるのです。

6B サラの天幕への招き 62-67

⁶² 一方イサクは、ベエル・ラハイ・ロイ地方から帰って来ていた。彼はネゲブの地に住んでいたのであった。

ついに、イサクが現れました。彼は、ネゲブのほうにいました。23 章でアブラハムが、ヘブロンところで死んだサラのところに来たとありましたが、それはイサクと共に、このベエル・ラハイ・ロイなど、ネゲブ辺りにいたからではないかと思われます。

⁶³ イサクは夕暮れ近く、野に散歩に出かけた。彼が目を上げて見ると、ちょうど、らくだが近づいて来ていた。⁶⁴ リベカも目を上げ、イサクを見ると、らくだから降り、⁶⁵ しもべに尋ねた。「野を歩いて私たちを迎えに来る、あの方はどなたですか。」しもべは答えた。「あの方が私の主人です。」そこで、リベカはべールを手にとって、身をおおった。

イサクは面白いですね、自分のお嫁さんであることは分かっているのに、ゆっくり迎えに来ています。マイペースの人ですね。

いずれにしても、父の家にイサクがいて、そして、そのイサクのところにリベカが、しもべによって迎え入れられました。

それがイエスが、弟子たちに語られたことです。「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったのでしょうか。3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」そうして、顔と顔を合わせて見ることになります。「I コリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときに

は顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。」

⁶⁶ しもべは、自分がしてきたことを残らずイサクに話した。⁶⁷ イサクは、その母サラの天幕にリベカを連れて行き、リベカを迎えて妻とし、彼女を愛した。イサクは、母の亡き後、慰めを得た。

サラの天幕で、夫婦の関係を結びました。サラが亡くなってから約三年後のことです。雅歌においても、夫婦の深い結びつきが、妻の母のところで行われています。親密な結びつきであります。こうやって、サラの死後の慰めがイサクに与えられました。

私たちが最後の慰めは、主ご自身に会うことです。私たちは子羊の妻と呼ばれます。天のエルサレムにおいてです。「黙 21:3-4 私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。4 神は彼らの目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、悲しみも、叫び声も、苦しみもない。以前のものが過ぎ去ったからである。』」